続 徒然 つれづれ

生活ごみの有料化

桑野　巍

「松茸会席フルコース全11品の昼食をご用意していますから、どうぞ。」こんなバスツアーや一泊旅行の宣伝広告が目につく。いまさら松茸の茶碗蒸しに松茸ご飯、天ぷらに焼き松茸でもなかろうと思いながら、念の為に宣伝文や写真を眺めた。涎（よだれ）は出てこなかった。きっとニーズがあるんだろうとか、観光に季節食という付加価値をつけた商魂は立派とかを自分なりに想像してみたりした。

どちら産の松茸か知らないが日本人はない物強請（ねだ）りだ。店頭で見ると値段も結構高い。最近は北朝鮮産という表示を避けており、どうも韓国、中国、カナダ、北欧産が多いらしい。加齢するに従って粗食を旨とする意固地からか、少糖多果を好むからか、松茸類に食指が湧いてこないのはなぜなのか。食欲の秋だというのに、栄養面だけでなく、自然のロマンや独特の香りを味わう気もいく分薄れている。

若いころ周囲から「食い意地の張っている奴」と言われて、恥かしい思いをし、肩身が狭かったが、貿易記者クラブを担当することから、食品についてもグローバルな視点に立つことが多くなった。その視点とは人口爆発と食料危機、貧困の拡大、資源の枯渇、環境の破壊などで、自分でも不思議な転換だと思っていた。仲間内ではグローバルという言葉はあまり使わず、インターナショナル・インタレスト、ナショナル・インタレスト、ローカル・インタレストなどの分け方をした。

国内（ナショナル・インタレスト）では、政治や経済のほか心の健康、体の健康、食生活の改善、食教育の充実などになろうか。地域での生活者として考えなければならないのは、自然によって生かされ、他人によって生かされているという自分を発見しなければならないのに、どうもローカル・インタレストに熱心になれなかった。いまになって自問自答しているがもう遅い。それよりも「知るほどに知らざることが急に増え」という現象が自分を取り巻いているのだから依然不勉強者だ。

身近なところで、毎週月曜と木曜日の午前９時ごろ家庭ごみの収集車が訪れて、マイクで「少量化」を呼びかけられ、はっと気付く。ご馳走もよいが各家庭はどんな減量に取り組んでいるのか、どうリサイクルしているのかの疑問も湧く。同時に企業が排出する産業廃棄物はどう処理されているのか、にも思いが及ぶ。各家庭から出てくる生活ごみは５年前に比べ、かなり減っているという統計があるが、これを喜ぶのではなく「ごみを３年後には30％減量するくらいの取組が必要」と思ったりする。

また、個人が排出する家庭ごみは単に自治体委せでいいのかどうか、住民サービスの旗印のもとに始められたごみ処理の無料化は使い捨て製品を売る産業側にとっては好都合であったが、無料化は住民サービスというよりも、むしろ使い捨て製品を売り込む産業側へのサービスという役割を果たしてきたのではないか、などが頭の中を去来する。

現在すでに家庭ごみ処理料の有料化を実施している市町村はかなりあると思うが、一般住民も企業住民も意識改革を図る上でも、未実施の地方団体は住民、企業、議会を巻き込んで有料化問題の議論を展開したらどうか。議論の期間は長くて５年、論議はすべて公表し、結論は市町村議会に委ねるべきだろう。

ただどの地方団体もごみ処理の有料化については反対意見が多いのも事実だと思う。金銭さえ払えばごみを大量に捨てても構わないとか、金銭で何でも解決しようとする風潮は好ましくないといった意見も出てこようし、低所得者層の家計を圧迫したり、かえって不法投棄が増加するという意見も出るだろう。

一方、有料化すべしという意見の中では、無料化継続によって排出者がより無責任になり、問題意識が希薄になってしまうし、減量化に努力している住民が報われないではないかという意見もあろう。有料化によってモラル向上や再資源化が進行するという意見も出てこよう。いずれにしてもごみ問題が資源浪費や環境問題を解決する糸口になれば申し分ない。行政側も議会側もなぜかこの問題を論点にしたがらないが避けて通ることはできない。地域の住民、行政、議会はそれぞれの立場で知恵と勇気を出し「総合的協働力」を発揮してほしい。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）